一般財団法人日本不動産研究所 ⑲

地域資源を生かす

～まちづくりからインバウンドまで

山梨県早川町

日本一人口の少ない、山岳信仰の「町」

若者が行事と町並み再生

山梨県の西部、南アルプスのふもとにある日本でもっとも人口の少ない町（18年8月1日現在、1079人）、早川町。土地価格は、山梨県内の最低価格地である。1956年に6つの村が合併してできた町で、町土の約96％を森林が占める。現在も独自の特色を持つ約40の集落が点在し、その一つに標高500㍍余、急斜面の山腹に雛段状に形成された赤沢集落がある。

身延往還の宿場町

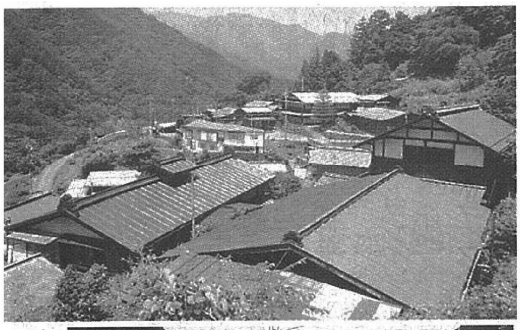
赤沢は日蓮宗総本山身延山久遠寺と霊場七面山を結ぶ参詣道（身延往還）の中間に位置し宿場町として栄えた集落である。家々を支えるゴボウ積みの石垣、石畳の坂道、石段、木造の民家や旅籠、その軒下には未だに講の名前が書かれた木札〝講中札〟が掛けられている。その町並みが周囲の山々と調和し、往時を偲ばせている。

西側を南アルプスに阻まれどこにも抜けられないような不便な場所にもかかわらず宿場町として栄えていたのは「信仰」と深い関わりがあるようだ。江戸時代中期、山岳信仰が盛んになり、信仰者の集まりである「講」と呼ばれる組織が江戸を中心に作られ、山に登り神々を崇めていた。霊場七面山も山岳信仰の拠点の一つである。徳川家康の側室・お万の方の登詣により、女人禁制が解かれ、身延講が盛んになり参拝者が多く訪れるようになった。

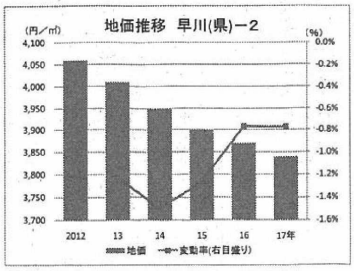
山あいの集落は参拝者の休憩、宿泊所として次第に形態を整えていき、参拝者の案内、強力、駕籠人足などを利用する人たちも多くなり赤沢宿は繁栄し活気にあふれていった。また1920年に富士～身延間に鉄道が開通、28年に甲府まで通じたことで参拝者が急増、最盛期の45年頃には一日に数千もの人々が行き来したと言われている。

しかし、自動車道路の整備や交通の便がよくなるに従い参拝者は赤沢宿を通らず七面山へ廻るようになり、55年頃には宿の利用客は激減。更に若者の都市への流出により過疎化が進み、最盛期に9軒あった講中宿も現在営業を続けるのは「江戸屋旅館」1軒のみで、赤沢宿は昔の面影を失いつつあった。

80年頃この問題を憂い、Uターン者を中心とする集落の若者が青年同士会を結成し集落の活性化に取り組み始めた。お盆の伝統行事、石畳の両側に約300張りの提灯を並べ町並みを幻想的に照らす「千灯祭」など年中行事を復活させた。町としても集落内参詣道の石畳の整備を始め、集会所（喜久屋）の復原、集落下水道整備など精力的な活動が展開された。



㊤標高500㍍にある、天空都市のような赤沢集落 ㊨㊤かつての赤沢宿の面影を残す石畳 ㊨㊦唯一営業を続ける「江戸屋旅館」



古い旅館はリノベ

93年には江戸時代から残る講中宿の町並みが、重要伝統的建造物群保存地区に選定された。古い旅館はリノベーションされ、観光案内所やゲストハウスとして息を吹き返している。生まれ育った場所の価値を見直し地域振興につなげるべく保存、整備に取り組んできた赤沢の人たちの努力と思いが伝わってくる。

江戸時代の情緒ある町並みを後世に引き継ぎ、観光も見据えた今後の取り組みに期待したい。

（甲府支所、不動産鑑定士・杉本裕昭）